

宇野千代についての研究

藤 伊 靖 江

目 次

- はじめに
- 本 論
- 第一章 生いたち
 - 第一節 放蕩者の父
 - 第二節 生母と義母
 - 第三節 文学への出発
- 第二章 男性遍歴
 - 第一節 初恋に至るまで
 - 第二節 恋愛と文学
 - (一)尾崎士郎との生活
 - (二)東郷青児との生活
 - (三)北原武夫との生活
 - 第三節 恋愛観
- 第三章 『おはん』
おわりに

はじめに

宇野千代の名を、初めて耳にしたのは、確か高校二年の日本史の時間であつたと思う。千代は、我が母校、岩国高等学校の前身である岩国高等女学校の卒業生であるため、何かの拍子に、先生が彼女の名を口にされたのだろう。その折に、奔放な生き方をされてきたことを聞き、自然に興味を抱いた。

実際に作品に触れたのは短大に入ってからであつたが、興味をひかれるどころか期待を裏切られてがっかりし、後には少し軽蔑した気持ちさえ起こってきた。しかし、色々な作品を、読み重ねて行くうちに、知らず知らずのめり込んでいる自分に気がついた。もはや軽蔑などという気持ちは消えて、彼女は彼女なりに考えて生きているのだと、彼女を、またその生き方を認めていた。

彼女は、物事に対して感じた事を、ただ素直に表現しているだけではないか、と思うようになってきた。

色々な男性と出逢い、即座に恋に落ち、なりふりかまわず相手に尽くし、別れ、そして立ち直り、また次の恋に落ちてゆく。これはどのバイタリティが、彼女の心にとのように潜んでいるのか。

底知れぬ情熱を秘めた宇野千代という女性の生き方を、作品や男性との交わりを通して見つけて行きたいと思ったのである。

なお、本文に引用する千代の作品は、『宇野千代全集』（中央公論社）と、『生きて行く私』（毎日新聞社）によった。

第一章 生いたち

第一節 放蕩者の父

宇野千代は、明治三十年（一八九七）十一月二十八日、山口県玖珂郡横山村三二九番屋敷（現在岩国市川西町二丁目九番三十五号）に、宇野俊次の長女として生まれた。

父、俊次は、安政二年（一八五五）七月二十九日、同郡高森村、宇野茂吉の次男として生まれたが、分家の宇野熊太郎の養子となった。宇野家は代々酒醸造を業とする旧家であり、先祖は、玖珂郡鞍掛山の城主杉隆泰の家老、宇野筑後守正常であった。

俊次は、これといった職を持とうとせず、月に二度、高森の実家から届く金を使って遊び暮らしていた。

「父にとつて、金はいつでもあった。高森の吉野（注＝宇野）の次男であったから、金に困るということはなかった。どこでも、放蕩無頼な生活をしていたと言うことである。」（『宇野千代全集第七巻』『或る一人の女の話』p 20）

その俊次も、「ドストエフスキーか、バルザックの小説にしか出てこないようなものすごい父」と、千代自身が語るように、躰は大変厳しかった。

「学校へ行く時、雪の降った日があると、『千代、今日は雪が降

っているが裸足で学校へ行け。』と言います。『草履をはいて行く』と草履は腐るかもしれない。しかし、裸足で歩いても足は腐らない。』と言います。私は、『はい。』と答えて父の言う通りにしました。すると、裸足で歩いていると町の人が、『千代さんはかわいそうなことに、また今日も裸足で学校へお行きます。』と気の毒がってくれました。」（昭和五十九年六月九日、宇野千代講演会より）

その父も、学校で出来の良い千代が、毎年春に褒美を貰うと、千代と並んで街を歩き、知り合いの家をあつちこつちと訪ねては、『今日はこいつが、学校へ呼ばれての』と説明して回ったという。千代にとって、こういう父を見るのは、意外なことであつたらしい。大正三年（一九一三）二月八日、俊次は病没した。千代は十六歳であつた。

「死の三日前に、雪が降った。南国のこの町では雪は珍しい。この雪を父は何と見たのだろうか。父の部屋に誰もいなかった束の間のことである。気がついた時には父は、店の間の上り框から庭に下り、往還ににじり出していた。『ねぎへ寄るな、ねぎへ寄って怪我をするな。』と、叫びながら、何かを振り廻していた。日の中へ光るのは刃物であつた。父の着物の裾から、汚物が流れ出ていた。（略）その雪の上に、父は夥しい血を吐いた。（略）一枝は父に縋りついた。『誰方か、誰方か助けてつかアされ、』魂切るような母の声がした時、『おどれ、ねぎへ寄って殺されるな、』声だけで、父はその時雪の上に突伏したのであつた。」（第七巻『或る一人の女の話』p 34）

この父が死んだ時、町の人が千代の家へ来て、「まあ、これでお宅も楽におなりになりましたのう。」「これからは、やかましう言うのがおらんでようございますのう。」と、お悔やみではなく、お祝いを言ったそうである。

しかし、千代は、少しも父親を恨んではいない。それどころか、「もう一回、子供時代を過ごさなければならぬ」としたら、また、同じ父に育てられたいと思っています。」(昭和五十九年六月九日、宇野千代講演会より)と言う。

「父の生きている間、一枝(注Ⅱ千代)のうけた扱いには、一貫したルールがあった。或いは、父の性格から来る、そのときどきの思いつきであったかも知れないのに、一枝にとっては、それは一貫したルールに見えた。父がいま、何を望んでいるか、間髪を入れずそれを察し、その望んでいる通りにする。敢えて言えば一枝は、そのことだけに、喜びを感じていたかのようであった。子供にとってそれは苛酷なことである。しかし、苛酷だと言えようか。一枝はいつでも、進んで自分から、それをしたのであったから。」(第七巻『或る一人の女の話』p 24~25)

この父の影響は、後に、明らかに千代に見ることが出来る。それはまた、千代にとっての男女関係の心情の核をなすようになった。

第二節 生母と義母

生母トモは、明治六年(一八七三)七月二十八日生まれで、玖珂郡の土井弥兵衛の四女であった。しかし、トモは、肺結核を病み明治三十二年七月十三日、二十五歳の若さで死去している。

「一枝はしかし、自分を生んだ母の顔を知らない。娘の頃になつて一枝が、町を歩いていると、町の女たちが寄つて来て、「やれ、一枝さまのお母に生写しにおなりんされたことよのう」とよく言つたから、たぶん、自分と似た顔をした女だつたらうと思う。

(略)母が死ぬ時は、一枝はやつと歩ける、という頃だった。赤い提灯をつけたのを持って、母の寝ている蒲団のぐるりを、よちよちと歩いていた。「この子のことが気にかかつてのう」と言つて、母が泣いたというのである。この話は少女小説のように聞こえる。しかし、一枝はその幼かった自分のことを聞いても、悲しくはならない。この母のこの言葉をそのまま信じて、悲しくはならない。一枝の中で、母の姿は抽象体になっていて、生身の母とは思えないからである。」(同前p 8)

生母が死んだ時、千代はまだ二歳であったため、生母の思い出というものは無い。仏壇の中の位牌を除いては、写真も着物も無かつたという。ただ、自分の生身が、この世に生まれ出た不思議さについて考える時、この姿さえ思い浮かばぬ母に感謝する気持ちになつたことがあつたと言う。

母の死後、千代は高森村の自家の伯父、宇野政介の許に預けられた。

明治三十三年五月、父俊次は、佐伯リュウと再婚した。リュウは玖珂郡川下村第八七番屋敷に、明治十六年五月二十六日、父佐伯順一郎、母ミエの四女として生まれた。

千代は再び生家の川西の家に戻り、後年までリュウを実母と思つて育つた。

「高森から帰ると、家には新しい母が来ていた。いや、新しい母などと、一枝に思われたらうか。一枝の記憶には、前の母とか新しい母とかの区別がない。自分の生母が死んでいるのが分からない。新しい母はこの家の中にならずといたようにしか思われない。『お母』と呼んでいた。」(同前P12)

それから次々と、五人の弟妹が生まれた。しかし、母リユウは、食事時には「姉さまがお食べてから」、入浴の時には「姉さまが入りてから」「姉さまがお出てから」と言って、長女の千代を立てるように厳しく躰けた。生母を知らない千代は、こういう母をごく自然に受け入れ、愛したのだった。

この母は、十七で、父俊次の後妻となった。父といえは、その半生を放蕩無頼に過ごした四十男で、若い母との間には、生活上の食い違いがあった。泣くこともあった。或る夜更けに、母は、その生家へ逃げ帰った。

「お母、お母」と呼んで、いなくなった母の姿を追うので、女中の一人がもてあまして、川下の家まで一枝を背負って行ったと言う。(略)『あの時、一枝さんがわしを追うてお出でざったら、この家には戻らざったかもしれん』母はそう言う。(同前P13)

父が他界した後、母は義濟堂という町の糸とり工場へ出るようになった。後年、千代が、あの時は辛い思いをさせて悪かったと詫びると、ちっとも辛くなかった、自分は唄を歌うのが好きで、みんなが、自分の声に聞き惚れるのが自慢で、糸とりに行っていた、と笑って言ったという。

この母からは、苦勞を苦勞と思わず楽しみに代える術を、千代は

学びとつたのではないかと思う。

第三節 文学への出発

千代は、明治四十三年四月、玖珂郡立若国高等女学校に入学した。厳しい父の目を怖れながらも文学に興味を抱き、新聞や雑誌などを読んでいた。女学校でも、この方面の読書を禁じていたが、彼女は『第三帝国』『青踏』などを読み、密かに文学仲間をつくり、変名で『女子文壇』へ投稿したりしていた。

大正三年三月、女学校を卒業し、川下村小学校の代用教員となった千代は、翌四年、十八歳の年に、葭屋柳葉子(菊池寛一)、長岡白朝居、鏑田芳花(鏑田研一)、大島千延、米本秀子、白木淑子を同人として、「海鳥社」をつくり、回覧誌『海鳥』を発行して、小品や詩、短歌などを発表したが、三号で終わった。その年の秋、同僚の玉田との恋愛問題から学校を退職し、女学校時代の恩師を頼って京城へ渡った。

京城から帰国後、第三高等学校の学生だった従兄弟の藤村忠と京都で同棲生活を始めた。忠が卒業し、東京帝国大学に入学したので、千代も上京したが、故郷の家からの送金は断たれていたのので、千代は雑誌社の事務員をしたり、家庭教師をしたり、モデルになったりして働いた。

本郷の燕楽軒にわずか十八日間ではあるが働いたことがある。そのことが、千代の将来を決定づけたと言っても過言ではない。

燕楽軒の近くに中央公論社があり、『中央公論』主幹瀧田樞陰が昼食時には必ず現われ、自然に今東光、東郷青児、芥川龍之介、久

米正雄、菊池寛、佐藤春夫らを識るようになった。特に美少年であった今東光とは、よく散歩もした。その時のことが、芥川龍之介の作品『葱』の題材となったと言われている。この頃の千代は、『万朝報』の懸賞小説に応募して、時々十円の賞金を得ていた。

大正九年三月、忠は大学を卒業し、北海道拓殖銀行に就職したので、九月、任地札幌に赴いた。二人は前年八月二十九日に正式に結婚していた。

千代は、仕立て物などの内職をしていたが、「毎夜、雪に閉ざされ、往還を走って行く馬櫓の鈴の音を聞いている中に、ふと、「そうだな。私も何か書くのだ。」と思うのであった。」（第七巻『或る一人の女の話』P100）そう思いついた丁度その時、当時東京の大新聞と言われていた『時事新報』が、翌年の正月向けの催しとして懸賞小説を募集していた。

千代は、一気に書き上げた。それが『脂粉の顔』（筆名、藤村千代）である。この処女作が、一等に当選し、賞金は二百円。大正十一年一月に掲載された。二等は、尾崎士郎の『獄中より』だった。

これで自信を得た千代は、百二十二枚の小説『墓を発く』を書いて、燕楽軒で給仕女をしていた時に識った瀧田樗陰のもとに送ったしかし、何の返事もなく、矢も楯もたまらず、東京へ確かめに行くことになった。千代三十九歳の時である。

「ぼお、と汽笛が鳴って、汽車が走り出した時、ふいに私の両の目から涙が溢れ出し、その涙のために、ホームに立っている悟（注）忠の姿が、霞んで見えなくなった。」（『生きて行く私』

上・P110）

これが、藤村忠との別れとなった。

問題の『墓を発く』は、『中央公論』五月号に掲載されており、千代は、本格的に小説を書いて行こうと心に決めた。

なお、藤村忠は、千代の最初の夫、藤村亮一（の弟）である。

第二章 男性遍歴

第一節 初恋に至るまで

明治四十四年（一九一）年、千代十四歳の夏、生母の姉にあたる藤村家の伯母から初めて実母のことを聞かされた。それから間もなく、父から、この伯母の家に遊びに行くように命じられ、千代は言われるままに出掛けた。灰暗くなりかけて千代が暇を告げると、従兄にあたる藤村亮一が、伯母に言われて、千代を送った。二人は、暗くなりかけた道を歩いた。しかし、帰って来た千代に、父俊次は「おどれ、ほんとに暗くなるまで、よう男と歩いとったな。」と言って、彼女の頬を打った。

藤村の家から千代を亮一の嫁に貰いたいと言って来た。意外なことに父は、この申し出をすぐに承諾した。

こうして、千代は亮一の許に嫁入りした。

しかし、藤村の家で暮らしたのは、わずか十日間であった。中学生と女学生の結婚は、ままごとのまま終わった。

女学校を卒業し、小学校の代用教員となった千代は、教員の講習会に出席した際、一人の男に見染められ、嫁に貰いたいとの申し入れがあったが、祖母を通して断わっていた。が、ある日、その男が直接尋ねて来た。男は日が暮れかけても帰ろうとしない。千代は

「結婚する気はないが、晩飯ぐらいは作ってやっても好いのではないか」(『生きて行く私』上・p 54)と思ひ薯を煮た。やがて雨が降り出したので障子をしめたとき男に抱きすくめられた。「今なら逃げられる。(略)そう思ひながら、私は声を上げなかった」(同前p 55)千代は逃げるところか、自分から男を奥の部屋に誘ひ込んだ。

「夢にも結婚する気はないのに、私はそれを待っていた」(同前p 55)

この一文は私には衝撃であった。宇野千代は、俗に言う淫乱な女なのだろうか。

「一瞬の間に、それは終わった。これが、あのことか。私は男から逃げないで、ただそのことだけを渴望して、男に組み敷かれたまま動かなかったのだと思うと、その恥ずかしさのために、男の顔を見ることができなかった」(同前p 56)

そして千代は狂気のふりをした。千代はただ自分の中の「女」の本能を恥じたのではないだろうか。女性なら、その心の奥深くに潜んでいる「女」を素直に行動に移したのではないのか。父の持つ激しい衝動性が、こうして千代の中の「女」にも現われたのではないのか。自分のしたことを恥じ、狂気を装ったという千代は決して淫乱な女性ではないと思う。

それから半年も経たぬ頃、川下村小学校に新しく赴任して来た教員玉田に心を奪われた。千代は授業中に手紙を書いては、生徒を使って届けさせた。

やがて、千代は玉田の家に通うようになり、この二人の關係は村中に知れわたった。そのため、千代は小学校をクビになり、女学校

時代の作文の教師を頼って京城に渡った。

京城に渡ってから、彼女は毎夜のように玉田に宛てて長い手紙を書いたが、返事はごくたまにしか来なかった。ある朝、部厚い手紙が届いた。それには玉田自身も、山奥の学校に流されたこと、そして、これを最後に今後は一枚のハガキも出さないと書いて書いてあった。千代は、いてもたってもおれず、すぐに荷物をまとめて京城を後にした。

翌日の昼には下関に着き、日の暮れかかった頃、玉田の宿を訪ねた。が、玉田は邪険に千代を追ひ帰そうとする。玉田に肩をつかれはすみに、千代は山の砂利道をすべり落ち、玉田は部屋の雨戸をびしゃりと閉めた。

「私の心の中には、まだ、あの、亡くなった父の命令は、これがどんなに不条理なことであっても、唯々諾々として服従した、あの習慣が残っていた。こんなとき、その習慣が生きて、私に、どんな苛酷なことにも平気で従わせる、力になっていた」(同前p 77)

こうして千代の初恋は終わった。

第二節 恋愛と文学

第一章第三節で述べたように、夫、藤村忠と涙の別れをして東京に出て来た千代は、本格的に小説を書く決心をして、巢鴨の畑の中にあつた百姓家の離れを借りて執筆生活を始めた。

(一) 尾崎士郎との生活

千代は、『中央公論』五月号掲載の『墓を発く』を認めてくれた室伏高信へ挨拶に行った時、尾崎士郎を紹介された。忽ちのうちに心を惹かれ、そのまま千代は当時尾崎が住んでいた菊富士ホテルまで同行した。

尾崎と生活を始め宿を転々としていたある日、『都新聞』（現在の『東京新聞』）の学芸部長、上泉秀信に勧められて、東京府在原郡馬込村一五七八番地の大根畑の中に、十坪ほどの農家の納屋を買取り、六畳一間と土間の家を建てた。

大正十三年（一九二四）の四月、藤村忠と協議離婚し、尾崎と正式に結婚した。

その頃、馬込村には、広津和郎・室生犀星・萩原朔太郎・牧野信一・川端康成・保高德蔵・吉田甲子太郎・今井達夫・藤浦洸・榊山潤といった文人達が住んでおり、千代たちの家はその溜り場となっていた。ちょっとした文士村であった馬込生活の中で、千代は旺盛な創作活動を展開し、童話も書いていた。

昭和二年二月、尾崎が川端に誘われて、伊豆湯ヶ島温泉に行ったが、それ以来尾崎と千代は度々この地を訪れるようになった。そこには、病氣療養中の梶井基次郎も滞在中で、千代も度々接するうち、次第に湯ヶ島で噂となり、馬込でも評判となった。三年の正月から尾崎は家を出て、カフェ・ライオンのウエイトレス古賀清子と生活を共にし、千代の知らぬ間に結婚式も済ませていた。

千代は、確かに年下の梶井の才能を敬愛し、彼を通して夫尾崎にない西欧の新しい文学にも触れることができた。自らも「多少に拘

らず、恋情に似た感情が混ざらないと、友情もまた、成り立たないもののように思います」(『第十二巻』「私の文学的回想記」p145)と言っている。

「あとにひとり残った私は、どんな積りで暮らしていたでしょうか。おかしなことを言うようですが、私は尾崎に対して、一度も悪意を持ったことがないのです。ひとり残されたことで、尾崎を恨む気持ちなぞ、夢にも持ったことがありませんでした。私のこの気持ちは人には理解されないことです。でも、こう言ったら理解されるでしょうか。私は尾崎が好きでした。その好きな人のすることには、邪魔をしたくない。邪魔をしないで好きなことをさせたい」(同前p148~149)

千代の男性との「別れ」は、それ以前も、それ以後も、いつもこのように、相手を恨むということはなかった。

尾崎と正式に離婚したのは、昭和五年八月のことであるが、その前後に千代は、幾つかの小さな擬似恋愛をしていた。梶井とのことも、その中の一つになるのだが、この時期のことを千代は自分で、「動物状態」と呼んでいる。

「私の心の中に隠れていた何かが、放蕩無頼の気持ちだが、失恋という状態をカサにでて来たのだと思います。夜も昼も戀愛をしているみたいで実は誰をも愛さない。自分自身をさえも愛さない虚無状態なでした」(同前『自伝的恋愛論』p117)

「この状態は人として一番卑劣な状態だと言う気がするのです」(同前) 「ふるふる可厭なことだと思つた瞬間に目がさめました」(同前)

この時、千代はすでに三十を過ぎていた。

(二) 東郷青児との生活

昭和四年十二月二十一日より『報知新聞』に小説『粟葉はなげ紅い』を連載していた。このタイトルは、梶井基次郎がつけたと言われているが、この中に、主人公の男女が、ガス自殺をする場面があり、そういう時の心理状態を知りたいと思った千代は、情死未遂事件を起こして評判になっていたフランス婦りの画家、東郷青児に電話をかけた。逢って話すことになり、東郷は、ある酒場を指定した。それは昭和五年四月のことである。東郷は店に入って来るなり、「一緒に僕の家へ行かないか。」と言う。千代は何のためらいもなくついて行った。翌朝、眼が覚めて蒲団を見ると、夥しい血痕がついていて、その血糊が固まったまま、かちかちになっていたという。それは、東郷が、西崎盈子と情死未遂事件を起こした時のものであった。

しかし、千代はそのまま東郷と生活を始めた。生活は苦しかったが豪放な東郷は、金が一銭もないのに世田谷の淡島に四、五百坪の土地を借り、コルビジェ風のハイカラな家を新築した。当然、借金に悩まされた千代は東郷の絵を持って、関西まで売りに出かけることもしばしばあった。

「私には青児の絵の意図するところは分りませんでした。しかし、その形と色との美しい抽象性は分るように思われました。そこにはその行動の荒々しさからは測られぬ、ある凝固した静謐さがあるように思われました。その頃、私の好んで書いた幾つかの

短い小説は凡て、この青児の絵の模倣ではなかったかと思うのです」(第十二卷『私の文学的回想記』P 160)

また、

「男と女が或る年月の間一緒にくらししている間には、当人同志はまるで自覚していないのに、根本的とも思われる影響をうけるものです」(同前P 167)

と、千代自身が言うように彼女の体の中には、いつの間にか東郷の波は及んでいたのである。後には、千代の創る着物にまで、その影響をおよぼしていた。

東郷は、絵ばかりでなく、ジャン・コクトオの『怖るべき子供たち』の翻訳の仕事もしていた。丁度その頃、「例のことを話そうか。」と言って東郷が、自分の情死未遂事件のことを話し始めた。これを、千代が聞き書きしたものが『色ざんげ』である。この小説は、他のどの小説よりもよく売れた。その原因を千代は、「これを書いた私の力よりも、この話をしてくれた東郷の話術の巧みさが、その大部分の魅力になっていたからです」(同前P 167)と言っている。

『色ざんげ』の後、『別れも愉し』『未練』を三部作として発表した。

「私の中には、やっと積み重ねて、自分で作り上げたものも大切には出来ないで、わざと荒涼としたものの中へ出て行きたくなる、放浪癖とでもいうものがあるのだと、いまなら私にも分るのですが……」(同前P 170)

二人が一緒に生活を始めてから四年目に、千代は、やっと落ち着

いた「優雅」な家を出て、千駄ヶ谷に百姓家を借り、そこで「仕事をやる」と言つて生活を始めた。

千代は、この二つの家を往復していたが、東郷が、先に情死未遂事件を起こした西崎盈子と再び親密になつたため、とうとう千代は東郷と別れた。この時、千代は初めて本気で人を憎んだという。

「あの女と一緒になるなんて、あんまり馬鹿にしないでよ。」と叫んだとは、千代が男と別れるに際して初めて見せた彼女の「弱さ」ではないかと思う。

(二) 北原武夫との生活

昭和十一年六月、千代はスタイル社を創立し、お洒落雑誌『スタイル』を創刊した。千代は三十九歳になつていた。

「いつでものことですが、私は男と別れた後、それが失恋した女のすることかと思われるほど、とんでもないことをし始めるのでした」(第十二巻『私の文学的回想記』P114)

この雑誌は、日本で最初のファッション専門の婦人雑誌というところで、大評判になつた。

昭和十二年四月のある日、この雑誌のことを記事にするために『都新聞』の家庭欄の記者、北原武夫が訪ねて来た。

千代は、二年前、『桜』という同人雑誌に載つた北原の長篇小説『悪徳の街』の第一回を読み、ひどく感動して、北原に賞讃の手紙を送つていた。その北原が訪ねて来たのである。千代はまた、恋のとりこになつた。

北原は、社の上司から、「あの女には近づかない方が好いよ。悪

いことは言わない。」と忠告されたが聞き入れず、千代の勧めもあり都新聞を退社して、作家生活に入る決心をした。

千代は、北原が作家として世に出るように尽力するが、北原も千代の『スタイル』の編集を担当し、斬新なアイデアで、にわかには発行部数を高めていった。

昭和十三年十一月、スタイル社より月刊文芸誌『文體』(昭和十四年五月、七号で終刊)を創刊、三好達治・井伏鱒二・北原武夫・千代が同人である。この頃千代は北原に感化されて、フランス文学に親しみ、文学的視野を広げた。また、コンスタンの『アドルフ』、ラファイエット夫人の『クレーヴの奥方』など、モラリストの小説を読み、文学と言うものの中に目的がある、と考え始めた。千代の文学的開眼の時期である。

翌年の四月一日に北原と千代は結婚した。

昭和十六年九月に三好達治、北原らと『文體社』を創立し、スタイル社と併立させて、『文體』(四号で休刊)を再刊した。『スタイル』は十月号より『女性生活』と改名した。十一月中旬、北原は陸軍報道班員として徴用され赤坂第一連隊に入り、その後彼の消息は断えた。北原はシンガポールからジャカルタに送られたのである。その間も千代は毎日せつせと食料を運んだ。ジャカルタに着いたことがわかってからも、衣料や食料を送り、手紙は毎日のように書いていた。

しかし、北原のいなくなった寂しさはどうすることもできない、やりきれなさがあつた。その頃、中央公論社社長嶋中雄作の家で、阿波の人形師天狗屋久吉の作った文楽の人形に魅せられた千代は、

翌朝には徳島へ旅立っていった。何かに没入することで気をまぎらわそうとしたのであった。

千代は、東京と徳島の間を五、六回往復して『人形師天狗屋久吉』を書き上げ、その年（昭和十七年）の『中央公論』十一月号・十二月号に掲載された。またこの時、徳島の或る古道具屋の主人から聞いた身の上話をもとに、『おはん』の下書きを始めたが、その完成したのは十年後のことであった。

昭和十九年一月、戦時下の統制によって、スタイル社を解散し熱海に疎開している。さらに北原の郷里栃木県壬生町へと移ったが、終戦後、再び東京に引揚げ、大森の馬込に住んでいる。

昭和二十一年、『産業経済新聞社』社長前田久吉の援助により『スタイル』を復刊し、驚異的な売り上げを見た。スタイル社は順調に発展し、千代と北原の仲も平穩に続いたが、生活の膨張・事業拡張の結果、昭和三十年に入って急速に社運は傾き始め、遂に三十四年四月、スタイル社は倒産した。

「私たちは追いかけてくる高利貸の目をくらすために場末の安宿に身をひそめました。『このときだな。人が首を吊りたいと思うのは』私はそう思いました。しかし、私は首を吊りませんでした。その安宿のすぐそばに、隣家の人の声が聞こえます。ここにも人の生活があることが、世にも不思議に思えました。北原と二人、肩をよせて眠ったその夜ほど、二人が一緒になってから、緊密な気持を持ったことがあったでしょうか」（同前P 205）

それから五年間、二人の間には奇妙な生活が続いた。千代は妹の家の二階を借りて着物を作っていたが、北原は別棟の離れで小説を

書いていた。

「相手は今何をしているのか、それさえ分らぬことが多かったのです。（略）おかしなことですが、この二つの工場で作った金で、或るとき、銀行の債務その他を凡て済ませたときに、二人はそうとは気付かず、別れる気配を感じていたのではないでしょうか」（同前P 206～270）

北原には若い愛人ができていた。昭和三十九年九月、二人は正式に離婚した。千代は、北原が出て行くのを見送った後、少しだけ泣いた。しかし、「それは別れるのが辛いからではなく、長い間、一緒に暮らしたなアと言う感慨の涙でもあったでしょうか」（同前P 210）と言う。二十七年間も一緒に暮らしていた北原と別れることを承諾した理由は、「二人にとって最早や、一緒にいなければいけないと思われる真の理由が、何もなくなっていたからです」（同前P 210）と言っている。千代は北原との間に、男女間の愛とは違った離れることの出来ない事柄が介在し、そのために固く結び合わされているように思い誤っていたのかもしれない。夫婦とは、同じ仕事の利害関係によって、つながっているものなのかも知れないと言う。

スタイル社が倒産する前年に、『おはん』で第九回女流文学者賞を受賞していた千代は、北原との間が破局に至るまでのことを書いた『刺す』を、三十八年一月から、『新潮』に断続的に書いていたが、四十一年に完結した。千代はすでに六十九歳であった。

こうして北原と別れた後、「始めて我に返ったような気持ち」で「せかせかしないで」再び小説を書くことに専念した。

第三節 恋愛観

千代の男性遍歴はよく知られているが、その内情を知らずに、ただその数の多さや大胆さといったものだけを取り沙汰されている場合が多いように思う。

しかし、千代は相手のどの男性にもひたむきなものである。千代の方から去った相手は、藤村忠だけである。その藤村に対してさえも千代は常に一途に尽くしていた。しかも、苦を苦と思わず、全身投げ出して行き、いつも前向きな姿勢で事にあたっている。これは、あの幼い時に身につけた千代独特の処世術であるように思う。

藤村との恋愛以外は、全てが千代自身の失恋ということになる。しかもその殆どの場合、相手が別の女性に心を移していたからである。しかし千代は、『あ、失恋したな』と思った瞬間に、あれは何と云うのでしよう、ドッと悲しさが押し寄せて来て、わあわあと言きました。声を限りに泣いていると、その声の中に、からつとした感情が湧いて来る」(第十二巻『自伝的恋愛論』P 67)と言っている。わあわあ泣いて、体力も精神力も消耗すること、突然あきらめがくるとも言う。「…私は失恋しても、相手の男を恨んだり憎んだりする暇がない。(略)忽ちの中に、私には新しい生活が始まって、それで一ぱいになって了うからです」(同前P 72)と言う。

失恋に限らず、どんな失敗をしても、一度反省したらもうそのことに執着せず、別のことに心と体を働かす。これが、宇野千代の若さの源ではないかと私は思う。

第三章 『おはん』

『おはん』は、おはんという正妻に一子を託して親許へ帰したまま、情婦のおかよという芸者屋の女主人の家で暮らす男の語り、という形で書かれており、その男が七年振りにおはんよりを戻そうとし、この二人の女の間で揺れ動いている様子が描かれている。

おはんは親許で肩身の狭い生活をしなが^{おはん}ら貞節に子供を育てており、「どこというて男の心をひくような女でござりませねど、いつでも髪の毛のねつとりと汗かいてますような顔の肌理の細こいのが取柄」(第五巻『おはん』P 128~129)で自分が正妻でありながら、「こないこととして、また、あんたはんの家庭をめぐ(こわすの意)かと思うと、それが恐しゅうて、」(同前P 136)と言って泣き、やつと親子三人でまた家を持てた、というその夜、「神さまの罰」で子供を失い、最後には再び夫を奪われながら一言の恨みも言わず、夫への最後の手紙で、自分が一時的に夫の気持ちに惹きつけたことを詫び、「思えばこの私ほど、仕合せのよいものはないやろと思うてるのでござります」(同前P 21)「ただこの際まぎになりましても申し訳ないのはあのお人へのござります。私の行きましたあととは、どうぞ私の分まで合せて、いとしがっておあげなさって下さりませ」(同前P 212)と言う。こういっておはんを「日本の古い町女房の型であり、自己を主張するすべを知らず、わずかに自己を犠牲にすることで、自分の主観的な幸福と平安とをつかもうとする。近松が理想化したタイプ」(山本健吉著『名作の女性達』下・P 195)、「内気で、しかも一種の献身の情熱といったものを内在してゐる」(『日本現代文学全集71』亀井勝一郎・作品解説P 386)などと評されてき

た。おはんは、一見消極的に影のような存在として生きながら、夫から「可哀そうな女」と思われることを拒否し、「仕合せのよいもの」と言い切ったその強さは、むしろ消極的というよりも、自分の運命を抗うことなく受け止め、その上で、自分の歩むべき道を切り開いてゆく「静」の積極性があるように思う。また、身を引きながら、夫を想うその情熱は、決して弱い女ではないことを表わしているように思う。このおはんは、作者である宇野千代の一面に通じているように思われる。

一方、妾のおかよは、生活力もあり、世話女房的な女であるが、独占欲が強く、他人のことなどかまわぬという冷酷さを持つ女である。男にとっては、そこが逞ましさ、頼もしさになるのであろうか。結局、またこの女の許に引き寄せられて行く。

この強い性格を持つ女の「男のいらんお人は、どこの国など行たらええ。あては男がいるのや、男がほしいのや。」という言葉の中に、女としての弱さを、ちらと垣間見たような気がする。このおかよからもまた、作者宇野千代を感じることが出来る。作者自身、

「この小説のモデルは私自身であるような気がしています。おはんの中にもおかよの中にも自分がいるように思われ、話し手のあの男の気持も、自分の心中を描いたように思われます。」(第二巻『おはん』について) P 243~244

と記しており、深く肯かされたのである。

浅見淵氏が『おはん』を「作者たる宇野千代の半生の愛欲曼荼羅

図」(『日本現代文学全集71』「宇野千代入門」P 393)と評されている通り、『おはん』は、単なる男女間の愛憎を描いたのではなく、

おはんとおかよが、入れ違いにやってくる場面の冷や汗の出るような緊張感や、男とおはんの息子悟の水死に見られるような因果応報の世界観というものが、根底をなしているように思うのである。

おわりに

途中、何度も挫折し、自己嫌悪におちいりながら、やっとの思いで書き終えたものの、改めてこの未熟な論文を読み返すとき、もっと時間をかけて、考えを温めて行けばよかったという後悔がしきりに募る。

宇野千代という作家は、たいへん遅筆なことで有名である。『おはん』などは十年という長い年月をかけて書き上げたものだという。行き詰まっても、毎日机の前に座わる。そして、自分の仕事を毎日続けているうちに「ハッ」と何か素晴らしいことを考えつくのではないかと述べている彼女の執筆態度に、私は今迄の自分自身の生活態度を反省させられた。

また、千代の、物事にぶつかった時の行動力のす早さ、失敗した時の心の入れ換えの鋭さ、失敗してもそれを恐れずに生きて行く前向きな姿勢、そして、人を憎んだり、悪口を言ったりしない心の柔軟性等、未熟な私には学ぶ所が多かった。この論文を書いたことによって、これからの私の人生の課題を見出せたことを喜しく思った。

参考文献

『宇野千代全集』中央公論社

『現代の女流文学』毎日新聞社

- 『文学三昧』河上徹太郎・新潮社
 『女流文芸研究』馬場憲三郎・南窓社
 『女流作家論』奥野健男・第三文明社
 『日本現代文学全集71』講談社
 『全集現代文学の発見11』学藝書林
 『名作の女性達(下)』山本健吉・角川新書
 『物語女流文壇史(下)』巖谷大四・中央公論社
 『生きて行く私(下)』宇野千代・毎日新聞社

評

「私の故郷は錦帯橋で名高い周防の岩国」と語る宇野千代が、藤伊さんには高校の大先輩に当たると。そうした郷土的な親近感もあって宇野千代を卒業論文のテーマに選んでいる。研究の目的は、女流作家の宇野千代ではなく、「恋多き女性」として知られている彼女の生き方・その恋愛観の究明にある。

幼い頃から、放蕩無頼一徹者の父と、苦境を恐れず明るく生きる善良な若い継母をこよなく愛した千代が、失意を耐えぬく強靱な生き方を身につけたいきさつを先ず考察している。千代の恋愛は、小学校教師への初恋もその後の男性遍歴も、すべて父の性格からくる一方的な彼女の衝動が源もとになっているが、いずれも一途に尽しながら失恋に終わる。しかしその別離は女性としてはまことにめづらしいさわやかさで、未練も執着もなく、すぐに別のことに心と体をはたらかすという明快な転換が千代の若さの源であると論述している第二章には、説得力がある。こうした個性的な男性との生活体験

はそのつど作品化されているが、その集約が『おさん』だとし、繊細なおさんも強靱なおかよも千代の分身だという作者の「あとがき」を、多くの文献に当たりながら裏付けている。

藤伊さんは、よく参考資料や作品に当たって、宇野千代の愛の実相とその人となりを自分なりに誠実に解明している。

(野崎アサエ)